



脱欧入亜？

東京支部長 荒木純道

世の中は、100年に一度？の経済大恐慌に見舞われて、全く先の見えない状況が続いています。今まで日本の産業をけん引し輸出の花形であった電機業界、自動車業界各社からは2,000億円、3,000億円と史上空前の赤字が次々と報道されて、しばしばう然としてしまいます。それに輪をかけて、10数年前から「理工離れ」が深く広く進行していて、工学部に籍を置く人間としては、本当に四面楚歌かと嘆きたくなります。

しかしだからこそ、問題解決の学問である工学の出番であるとも考えられます。そして今の困難な時代にこそ、次の時代を切り開く技術の種を育てていく努力が必要であります。我々の学会が主導的役割を果たしている電子情報通信の分野にはきっと数多くの技術の種が芽吹こうとしているはずで、そして新しい技術の種は必ず若い人々の知的好奇心、もの作りの心と呼び起こしてくれるはずで、欧米には見られない電子情報通信学会の独自の学会活動である研究専門委員会活動を中心に更に知恵を出し合って技術の種を発掘し、新たなアイデアを育てていきたいと思えます。例えば、全国津々浦々にある温泉につかりながら泊まりがけで議論をし尽くすなども考えられるかと思えます。

一方、研究会とは違う活動として支部活動があります。私が関係している東京支部では、大規模なシンポジウムや講演会のほかにも、草の根的な活動として小中学生への理科教育を支援する活動をしています。こうした地道な活動が今後きっとますます重要になると思えます。

また今回の経済危機の一因が米国一国集中主義による弊害にあるとされています。同様に電子情報通信の世界でもIEEEの寡占が激しくなっています。しかしよく見ると北米の会員数自体は60%程度に減少し20数年後には30%程度になるとの予想もあります。既にカリフォルニア大学の電気系学科への志願者は1980年代の1/3まで低下しているそうです。逆にアジア太平洋地区は世界中で最も会員数の増加率の高い成長地区になっています。その中で電子情報通信学会がIEEEとは違う基軸としてアジア太平洋地区の各国との連携と支援の中で独自の役割を果たしていくことが求められていると思えます。翻ってみるとアジア中国文化圏は三大発明でも知られますように、少なくとも14世紀までは科学技術分野において世界のリーダーでした。

既に電子情報通信学会の支部は台湾、バンコク、シンガポールと広がってきています。これらを拠点にしてアジア太平洋地区のインターナショナルな基軸学会として活躍していく方策を今から真剣に検討していく必要があると思えます。